

佳作 — 第一部門 —

倒れた自転車



福岡県

田中 聞多

朝出がけに、駅近くの道でかなり深い水たまりに足を踏み込んだ。帰りには気をつけなければ思
いながら、ぬれた靴下が体温で温められてむずかゆいような右足の不快に耐えながら午前中の授業を
終わった。地下鉄の駅まで同行してくれた受講生たちにお茶に誘われたが、ぬれた靴下が気になっ
てお茶どころではなかった。

そういうわけで、電車を降りて駅舎を出たときには、水たまりを避けなければという意識がはたら
いて、道の右寄りを歩くように気をつけた。

ところが今度は、道の右側に止めてあった自転車に接触して、数台の自転車が将棋倒しになった。しまった、と一瞬立ち止まって、倒れた自転車を立てるためにその一台に手をかけたが、倒れた自転車にまつわる数年前のある出来事が脳裏にうかんできたので、かけた手をはなした。

地下鉄駅近くの繁華な商店街で点字ブロックに沿って歩いていた時のことである。換気扇からもれてくるおいから判断して食べ物屋の店先とおぼしい場所に点字ブロックの上にはみ出して止めてあった自転車に接触して倒してしまった。将棋倒しになったその数がどのくらいだったか見当がつかないほどの台数だった。途方に暮れて立ちすくんだ。行き交う人の多い街中でのことである。衆人の目にさらされているという身の置き所のないはずかしさと緊張。こちらには落ち度はない。点字ブロックはわれわれ視覚障害者が安心して歩くために敷設されているもの、目の見えない私がそれを杖で確かめながら歩いているのだから、その上に置かれた物はなんであれ私にとっては障害物である。倒した自転車はいちいち立てていてはたまらない。そのうえ、そんなことをしようものなら、倒したこちらが非を認めたと誤解されて、とんでもないことになりかねない。

点字ブロックがなかった昭和三十年代、私が学生だったころ、こんなことがあった。学校への行き帰りに通っていた路地に、めんるい麺類を満載した出前の自転車が行く手を遮るようにして止めてあったのに

気付かず、接触して倒してしまった。慌てて家から飛び出してきた相手に、思わず「すみません」と言つて、頭を下げてしまった。

自転車の倒れる音。食器が割れる音。近所の家々から出てきた野次馬たちが出前の少年と私を取りかこんで、私に同情するもの、配達少年に味方するものに別れて、いろいろと意見を述べはじめた。はずかしさとかやさしさでいたたまれなくなり、手持ちの金を少年にわたして、傍観者たちの視線を背後に感じながらそそくさとその場を逃れてきた日の苦々しい無念さが記憶によみがえってきた。

しかし今度は、点字ブロックが敷設されている歩道上でのことである。たとえ他人の目には生意気なように見られても、ここは一言、不法駐輪に抗議して毅然^{きぜん}としてこの場を立ち去るべきではないか。しかし、傍観者たちの中には私のそのような態度を、「窮鼠猫をかむ^{きゅうそ}」のたとえで「ひらきなおりの強がり」と誤解する者もないとはかぎらない。それではあまりにも惨めである。さりとて、なにも言わずにこの場を離れると、倒した自転車を放置して行ってしまうとは無礼なやつだと、視覚障害者に対する悪いイメージを植え付けることにもなりかねない。などなど、心の中で自問自答しているうちに、憤りとはずかしさで、頭の中が真っ白になった。

実際には一分足らずのことであつたろうが、私には身のほそるような長い時間に思えた。

食べ物屋らしい店から何人かの客が出てきて、無言で倒れた自転車を立てはじめた。一身に非難をあびているような肩身の狭さを感じて、心ならずも「すみません」と言つて、思わず頭を下げてしま

った。

その場を去りかねて立ちすくんでいた私に、通りかかりの男性が近付いてきて「ほっておきなさい。謝ることはない。あなたには責任のないこと。あなたが謝ると、非を認めたと誤解しますよ。目の不自由な人たちが安心して歩くための場所に自転車を止めておく方が非常識なのだから、倒したままに、さっさと行ってしまう方がいい」と、黙々と倒れた車を立てている人たちにも聞こえるように大きな声で言つて、立ち去りかねている私の背中をぐいとおしてくれた。地獄に仏とはこのこと、ほんと緊張がほぐれると同時に、不法駐輪に対して一言の抗議も出来ずにその場を後にした自分自身の意気地のなさに、空しい後味の悪い思いがいつまでも心に残った。

中学生のころ失明した私は、人権意識が育っていなかった当時の障害児教育の方針がそうであったわけでもあるまいが、学校でも家庭でも機会あるごとに「愛される盲人になれ」と言われ続けてきた。世間にはたてつかないで軋轢あつれきをさけ、従順に、言いたいことがあっても常に控えめに振る舞い、能力では晴眼者とは競うな。そうすれば、世間は「弱い者」には憐憫れんぴんの情を持って接し、保護してくれるという処世術を教えたかったのだろうか。それが習い性となつて、こちらに落ち度がない場合にも「すみません」という社交辞令を口にするように慣らされてしまっていた。

晴眼者と競うということについても、こんなことがあった。失明して間もないころのこと。夏休みで盲学校の寄宿舎から家に戻っていた私を友人たちが訪ねてきてくれた。風通しのよい縁側に腰をかけ、冷えた西瓜すいかをかじりながら積もる話に花が咲いていた。話題はあれからこれへと移って、野球のことになった。目が見えなくなつて、実際にはプレーが出来なくなつた私は、ラジオで野球の実況放送を聞くだけの楽しみしか残されていなかった。それだけに、ルールの解釈についてはそれなりの見識を持っていると自負していた。友人たちは私が蘊蓄うんちくをかたむけて解説するこまかい規則の適用例に感心して聞き入っていた。ところがそのうちに、仲間の中から私の解釈に異議をとねえるものが出てきた。中学生の議論である。白熱すれば声も大きくなる。声が大きくなれば興奮も高まる。傍観者たちははしらけてしまつて、いつの間にか論争にのめりこんでいる二人を残して帰つてしまつていた。議論は結論なしの痛み分けとなつた。その晩、母に「目が見えないのだから、負けてやりなさい」と諭された。血氣盛んな中学生の私である。これが自分の生きる道かと悔しい思いをしたことが記憶にのみがえつてくる。

それ以来、高校、大学、そして社会人となつても「目が見えないのだから我をはるな」と自らに言い聞かせては、淡々と生き、だんだんと「よく社会に適応出来た、愛される盲人像」をスマートに演じられる人間になる努力をしていたのかもしれない。点字ブロックが敷設されている歩道上の不法駐輪に対して毅然として抗議出来なかつたのも、このスマートさをてらう姿勢のあらわれであつたのか

もしれない。

しかし、爪^{つま}先立って背伸びをすれば七十歳に手のとどく今になって、ようやく「これではいけない」と、自らをいましめ、不条理に対しては私なりのやり方で抗議の意思を表明するように努めている。「目が見えないくせに生意気な」と見られても、毅然としなければならぬ時もある。ましてやは、教壇から若い学生たちに向かって、視覚障害者の立場から、バリアフリー社会とか、障害者の社会参加の機会均等などという話をしている身なのである。

数年前から、市内の二つの学校に非常勤講師として通勤する私にとっての目下の課題は歩行者にとって日増しに悪化する道路事情の中で、五感と白杖^{はくじょう}一本だけでいかにして身の安全を守るかということである。点字ブロックが敷設されている歩道は多くの場合、騒音の激しい大通り沿いにあり、その上に自転車や車などの障害物が置かれていて、かならずしも安心して歩けるとはかぎらない。騒音の激しい中での白杖歩行は、視界ゼロの中での計器飛行に例えることが出来るのではなからうか。ベテランパイロットにとっても、不安なはずである。そこで、私は可能なかぎり大通りをさけて、五感の中で私がつとも頼りにしている聴覚を使って歩くために裏道を選ぶことにしている。

ところが、こちらにも幾つかの問題はある。もうしわけ程度の歩道があるのは良いほうで、あつて

も狭いうえに、民家の入り口などではきれぎれになっている。また、歩道の有無にかかわらず、垣根の植え込みの枝が道にはみ出していたり、道路脇^{わき}にごみ箱が置かれていたり、コンクリート製の電柱が立っていたりする。道路上に車や自転車が止まっている可能性は、点字ブロックのある歩道よりも高い。

そこで、裏道を歩くために私が工夫していることは、危険防止のための帽子をかぶり、右手には白杖を、左手には伸ばした折り畳みの傘を持ち、危険に備えることである。何かありそうな場所では、不自然に見えないように左手の傘の先端を前に向けて歩く。障害物があれば傘が身を守ってくれる。衝突しても傘は自然にスライドして短くなるから障害物に損傷をあたえる心配はない。

繁華街の歩道についてもいろいろな意見がある。必要と思う所にはなく、それほど必要と思えない場所にそれが敷設されていることもある。また、点字ブロックはあってもその上にしばしば障害物が置かれており、適切な指導・監督のためのお巡りさんなどによる巡回が十分に行われているようには思えない。

こんなこともあった。地下鉄駅への階段入り口近くの店先の点字ブロック上でのことである。「ほら、前に自転車があるからよけなさい」と声をかけてくれる婦人がいた。通りかかりの人が親切に注意してくれたものと思つて「ありがとうございます」と言つて頭を下げた。ところが、周囲の状況から判断して、連れと雑談しながら買った品々を自転車の買い物かごに入れているのがその声の主だと

いうことが分かった。「よけなさい」とは何事ぞ！「こんな場所に自転車を止められては困ります」と穏やかに抗議した。すると予期しない抵抗にあつて頭に血が昇り、かつときたのか、「それじゃあ、どこに止めろと言うのよ」と、はき出すように言つて、こちらを睨みつけたらしい。しかし、見えな
い私は恐くない。目と鼻の先には無料の駐輪場があるにもかかわらず、この有様である。ここは我慢
比べと決めて、よけないで、自転車を移動するまで待つことにした。何事かと、行き交う人たちが立
ち止まって小さな人垣が出来た。そこで一言「こんな所に自転車を止めると皆に迷惑ですよ」と言つ
たら、衆目監視の中では、形勢不利と見たか、自転車の向きをかえて、そそくさと立ち去つた。生来、
私は平和主義者である。「ごめんなさい。ここに自転車を止めてしまいました」と言われれば、もつ
と穏便に「これからは気をつけてください」と言うだけですませたはずである。しかし、点字ブロッ
ク上に我が物顔で車を止めていながら、視覚障害者である私に「よける」と言うのは許せないのであ
る。

週に二日、通勤に往復するこの界限は、古くからの有名な市場があり、買い物客が多くさらに、近
くには学校や福祉施設などがあるために、歩行者や自転車を利用する人も少なくない。そのために地
下鉄への階段入り口近くには、大通りに沿つて無料駐輪場や緑地帯が設けられており、歩道もかなり
広く確保されているように思う。ところが、駐輪場からは乱雑に止められた自転車が歩道にはみ出し
ているし、緑地帯の内側のスペースには不法に車が止められている。また、歩道に面しては店が軒を

連ねていて、買い物客たちの自転車や車さらには、店に商品などを搬入するトラックが行く手を阻むように点字ブロック上に止められていることが少なくない。このような場合、止めた本人がそばにいないことが多く、直接移動を求めることは難しい。時々交通取り締まりの警察の車が走りながら拡声器で注意を促しているが、それでは実効があがるはずはない。

もつと深刻な問題は、店先に常習的に駐車されている営業用の車である。

通勤にいつも決まった道を往復する日が何年も続くと、特に店先を歩道に開放している八百屋さんや花屋さんなどの店の人たちとは顔見知りになり、朝晩の挨拶^{あいさつ}を交わすぐらいの親しさになるのは自然の成り行きである。

通勤初日の朝、十時少し前にその店先を通りかかったとき、愛想のよいおじさんが声をかけてきて「すみません、ここにちよつと車を止めさせてもらっています」と言つて腕を取つて車のよこを誘導して通してくれた。開店前の忙しい時間帯、商品の搬入の作業を中断して通してくれたと思ったので「ありがとうございます」と、その親切を謝して頭を下げた。帰りは学生たちが同行してくれることもあるし、市場の中の道も客の少ない時間になるので、近道でもあり、そちらを通ることにした。

講義の時間は決まっているから、その店先を通る時間もいつも同じで、そこを通過するたびに車が止めてあり、おじさんが声をかけてきて誘導してくれた。そんな日が続いても何の疑いも持たなかった。ところが年度がかわつて、講義の時間が午後になった。私がその店先を通る時間も当然のこと、

午後になった。驚いたことに、その時間にも店先には車が止まっていた。これはへんだぞと思った。

次の日も同じであった。迂闊^{うかつ}にも、営業用の車が常習的に不法駐車されていたのに気付かなかったのである。念のために、近くの福祉施設をよく利用する視覚障害者仲間たちに確かめてみたところ、白杖使用者のほとんどがその店先の車に気がついていていた。しかし、その人たちは月に一、二度のことです、あまり気にしているふうでもなかった。おじさんたちの親切を口にする者さえいた。

気付かずにいればなんともない事でも、それを問題と感じはじめればなんとかしなければ落ち着けないのが私の性分である。警察に通報して処理する方法もある。しかし、障害者が頻繁に行き来する地域で、われわれに気軽に声をかけてくれる人たちである。理解者であってほしい人たちでもある。さりげなく、そこに車が止まっていることにわれわれが迷惑していることを知らせ、不法駐車をやめさせるうまい方法はないものかと、あれこれ思案しているうちに、その店先を通るのが憂鬱^{ゆううつ}になってきた。学校帰りに通る近道もある。道は狭いうえに、自転車や車は止めてあり、買い物客の間をぬうように車も通る。安全とはいえない。しかし、鬱々^{うつうつ}たるこだわりを持ちながら、あのおじさんたちの愛想に対してどんな態度が取れようか。少々危険であっても、市場の中を通ったほうがどれほど精神的には楽かもしれない。

聖書には、神様から二ネベにはびこる悪を悔い改めさせるための使者として派遣されたヨナが、責任を回避しようとして船出し、嵐にあつて遭難し、海に投げ出され、大魚に飲み込まれた話があるが、

私も、自分自身を納得させられるやり方を考えだすまでの時間稼ぎにという口実のもとに、市場を通ることに決めた。

ところが今度は、買い物客の何人かに「せつかく点字ブロックが敷設された歩道があるのだから、あちらを通ったら」と注意された。もつともな忠告である。来るべき時が来たと覚悟して、歩道を通ることにした。

最初の日にはおばさんが明るい声をかけてきた。「ここに車を止められては困りますよ」と言ったら「えっ」と、息をのんで腕にかけた手をはなした。次の日にはおじさんが出てきて「うちも商売ですから」と、ひらきなおりと取れるような態度だった。「商売を口実に店先に駐車して、それが認められれば収拾がつかなくなりますからね」と応じたら、言葉がかえってこなかった。次の日からその店先には車が止められなくなった。一件落着である。しかし、無言の冷たい視線を背中に感じながらの通勤となった。

今度の「倒れた自転車」の場合、点字ブロックは敷設されていない田舎の駅前でのことである。だからといって、道端に通行に妨げになるような自転車の止め方をされては困る。それを自転車の持ち主に自覚させるには、いまここで私が倒れた自転車を立てることに問題はああるし、第一、立てたくないものである。生意気なようでも、ここで毅然としなければ私の立つ瀬がないのである。

とはいうものの、ここはたまたま通勤の途上往復する市街地の歩道上でのことではない。私が生ま

れ育った小さな田舎町である。四十数年間都会暮らしをして、郷里に戻った者に対してはいろんな意味で関心がある。ましてや、少年のころ失明して故郷を離れ、学校を出て、世間並みの勤めを終えて退職したあとも、いまだに街に出て働いている私はもはや「可哀想な障害者」^{かわいそう}としての憐憫の対象ではないのかもしれない。いろいろな目が私を監察しているはずである。

昼下がりの田舎の駅前。電車を降りた人たちは立ち去って、あたりには人声もない。倒れた自転車を前にして、故郷では母や兄弟たちにさえ理解されなかったイエスの悲しみを思った。

田中聞多

昭和十年八月十日生まれ 専門学校非常勤講師
福岡県糸島郡

選評

歩道に無神経に置いてある自転車。白い杖について歩く人が、それを倒してしまふ。謝るべきは、倒した人なのか、自転車を置いた人なのか。田中さんは自分の体験を、舞台上に演じられる劇のような情景描写と展開で描き出しながら、世間にたてつかなかった自分から、毅然とものを言う自分に変わっていった生き方を諄諄と語る。一見街角の小さな問題のように見えるけれど、そこにはバリアフリーの街づくりをばむ健常者たちの意識の粗雑さと自己中心主義がさらけ出されている。田中さん、「それでは困る」と訴え続けてください。

(柳田 邦男)